

仏陀バンク ～小規模小口融資への取り組み～

はじめに

民主主義とは、誰もが機会や権利が平等に保証される世界です。しかし貧困は、教育や権利への平等なアクセスを阻害し、単なる所得格差から社会構造的な格差へと拡大固定化されます。それは例えば、世界的に見れば、「南北問題」として、先進工業国と途上国の格差として現れています。途上国の貧しい人々は彼ら自身の責任でその境遇を選び取ったわけではありません。途上国を中心に蔓延する貧困と差別、その原因はなんでしょうか？

民主主義社会は、その経済的なシステムとして自由主義経済を開花させました。しかし時に、実質経済を伴わないまま行われる投機的な「行き過ぎた資本主義経済」は、世界的な富の偏在を生んでいます。西洋型の経済資本主義は、相手との取引から利潤を生み出すことを前提に成立し、世界均一の経済ルールの確立に寄与しましたが、弊害として、利益としての、利子を追い求める投機的なシステムを宿命として持っています。たとえば、「金融先物取引」などが代表例です。西洋型の経済資本主義にとって、「利子」で儲けることは経済活動の根幹です。しかし、お金の「貸し借り」には必ずリスクが伴います。このリスクをどう回避し、金利で沢山儲けるか？が投資家や金融機関の主要な関心事になります。この経済活動から、零細な個人は除外されています。通常の銀行は零細の個人になかなか貸したがりがありません。銀行は、「誰に貸せばきちんと返ってきて、誰に貸したら踏み倒される危険が多いか」という情報を持っていないからです。サラ金は個人にお金を貸しますが「リスク」を高金利で補てんし、採算をとっています。

利子で儲けることを宿命づけられた現代社会の弊害は、豊かさから取り残された途上国の人々の経済的な自立を妨げ、貧困から脱け出せない「負の連鎖」を生んでいます。四方僧迦では、個々人の経済的な自立があつてこそ、初めて本当に自立したコミュニティができるのではないかと考えました。そこで、お寺を中心にした「仏陀バンク(Bank of Buddha)」を立ち上げ、まず個々人の経済的な自立を図りながら、彼らが暮らすコミュニティ全体を次第に自立させようという試みを行っています。

仏陀バンクはそういったいわゆる商業銀行が相手にしないような個人を相手にしており、且つ、サラ金なみの利子を取っているわけではありません。低金利、ほとんど利子がないような額で、小規模にお金を貸すということをやっています。グラミンバンクなどもそうですが、仏陀バンクは借り手の情報をもっているから可能なのです。仏陀バンクのような試みがうまくいくかどうかということは、借り手に関する情報がどこまで貸し手に届いているかということにあります。仏陀バンクでは、利子はとりませんが、代わりに、お布施として、10パーセント前後寄付をしてもらいます。利子との大きな違いは、それは、出資者に利益として還元されるのではなく、それがそのまま次の貸し出しの原資となり、再び受益者に還元される。という点です。なので、利子とは概念が違います。

融資の審査には、原則として、寺、及び僧侶が関わり、みんなの前で手渡す。名前もブツダバンク、仏のお金を、仏の使者を通し、仏の前で借り、感謝の布施を添え、仏に返す。これがブツダバンクの所以です。(受益者の信仰の有無、宗派等は問わない)このシステムを支える信用組織が、寺という仏教文化を中心とした檀家制度というわけです。

視点 利子をどうとらえるか？ 西洋と東洋の違い

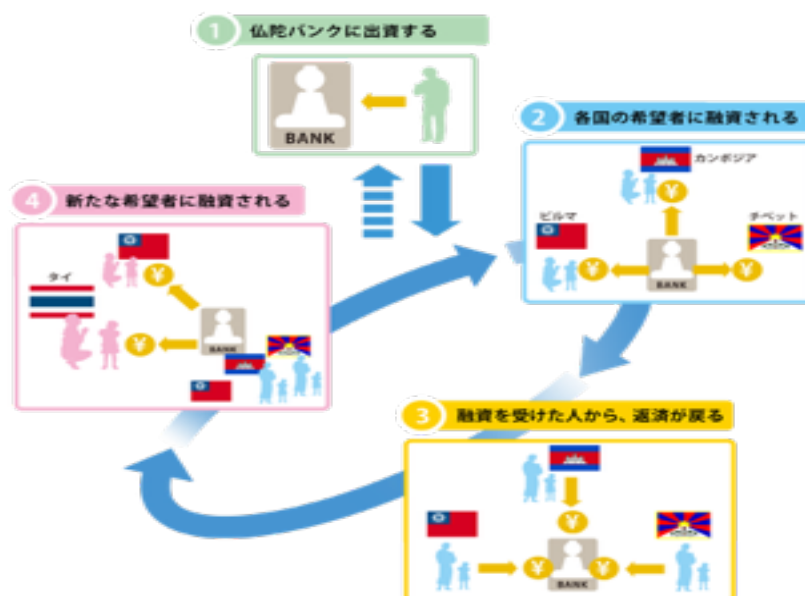
西洋人の発想のもととは、「自と他」です。つまり、西洋型の経済の発想のもととは、自分

と相手を主客の二つに二分して判断しています。これには利子こそが近代経済における妥当な概念だという、いわば世界観、価値観の違いが横たわっているように思います。

一方、東洋の発想、特に仏教的な発想から言えば、「私とあなたは同じ命を分け合って生きている。互いが互いの命をいきているから、たまたま貸借関係という経済的な縁が成り立っている」と受け止めるのが、自然な受け止め方だとも思います。江戸時代の曹洞宗の僧侶、鈴木昭三は、「労働は仏行」と言い、①正直、②社会貢献、③短期的利益ではなく、長期的視点、をなによりも重視するよう提唱しました。仏陀バンクの提起する問題は、すでに商業が、虚構の経済活動である金利を求めることに何の倫理的矛盾を持たない現代社会に、仏教という生き方を通してどう切り込んでいけるか、という価値観の問題でもあるのだと思います。

仏陀バンク (Bank of Buddha) の仕組み

仏陀バンクは、「小規模融資」と「地域通貨への試み」を融合することで成り立っています。利益としての利子を目的にしない、仏の慈悲に基づく、真に人間的な世界を実現したいという願いを込めたCSの活動のプラットフォームです。



その目的

- ・ コミュニティ内の個々人の経済的自立を助ける事業を優先的に支援する。
- ・ 地域コミュニティの自立からコミュニティ同士の連帯、サンガシステムの構築へ

特徴

- ・ 仏陀銀行の小規模融資は無利子である。
- ・ お布施という形で手数料は頂くが次の融資の原資に回され、それは共同体の自律的な運営に貢献する。
- ・ 返済の柔軟性（借り手の返済環境に合わせて変更できる）
- ・ 地域通貨という職能を利子として返済することもできる。それにより(働きという職能)を経済行為として提供する。これにより地域の経済循環を活発にする。

融資額

カンボジアやビルマの場合、1件当たりの融資額は概ね、1000米ドルから5000米ドルまでを上限としています。

融資対象事業

・融資の大半は、農業や養鶏、漁業など、一次産業を中心に商店や床屋、薬局、バイク修理屋などの小規模な設備投資など、個人（その家族）と村落共同体の自立に必要なビジネスに充てられている。

融資システム

小規模融資の決定は、選挙とくじ引きで選出された委員によって構成される仏陀銀行委員会が行っている。委員会には原則として、寺、及び僧侶が関わり、融資の希望者との間で、希望者の連帯保証人を交えて、インタビューを行い、希望者が申請する事業（基本的に零細型のスモール・ビジネス）を、返済方法に至るまで詳しく議論・調整し、双方の合意を以て、みんなの前で手渡す。（融資の実行）

※つまり、融資の前提として、仏陀銀行委員会を形成できるような現地の「主体」が完成されていること。被融資者に対する、現地共同体の継続的なケアと「眼」が融資の実行条件となっています。（リスクの回避）

返済

・利用者の事業の進展具合に合わせて、毎月、半年後もしくは1年後ごとの返済が行われている。（コミュニティに任されている）

仏陀バンクの原資は

仏陀バンク（小規模融資）の原資は、今のところCS日本で集められた「お布施=善意の原資」です。その浄財がアジア各国の仏陀バンクに賄われています。CS日本は、一度融資されたお金の運用には、原則、そのコミュニティの仏陀バンク委員会に委託し、口は出しません。しかし融資金の使われ方、返済の報告は、厳しくチェックして次の融資対象コミュニティの評価の基準にしています。

もう一つの試み 合法的な「地域通貨」の利用

仏陀銀行が地域経済を活発にするために考えているもう一つの方法として、合法的な「地域通貨」の利用があります。地域通貨（ちいきつうか）は、法定通貨ではありませんが、ある特定の地域内、あるいはコミュニティなどの中においてのみ流通する通貨です。法定貨幣と同等の価値あるいは全く異なる価値があるものとして発行され使用される貨幣です。その主な特徴は、

- ・村民ないし地域コミュニティにより発行される。
- ・無利子である。
- ・人と人をつなぎ、相互交流を深めるリンクとしての役割を持つ。
- ・価値観やある特定の関心事を共有し、それを伝えていくメディアとしての側面を持つ。
- ・原則的に法定通貨と交換できない。

地域通貨を利用することにより、地域コミュニティから法定通貨がなるべく外部へ出ないようにすることでバランスを図り、村全体の経済的な疲弊を回避します。しかし実現まで

には、ステップがあります。初めは小規模融資を主体に個人の自立とコミュニティの結束をはかり、住民の合意の上で次のステップとして地域通貨を併用していくことを考えています。

運営経費

仏陀バンクの運営経費はお布施の一部が当てられます。スタッフは、無給が原則です。その労働は、仏教の菩薩行として位置づけられています。

終わりに 私たちが望むもの「仏教徒パイプライン」

「仏教徒パイプライン」の建設もCSの大きな活動のひとつです。私たちが活動を行う地域は多くが貧しく政情が不安定な国々です。でも閉鎖された独裁国家であっても、両方の国境のお寺からお寺へ、仏教徒から仏教徒へという独自のネットワークを形成することで、私たちは支援物資を、「参拝とお布施というかたち」で漸次に被災地へと搬入することに成功してきました。こうした支援活動は、概ね、3つの段階（期間）に分けられています。①緊急期 ②緊急機を脱した次の段階ではリハビリ期、③次いで安定期（日常生活の完全な復旧）という段階を踏んでいきます。仏陀バンクはこの安定期の事業です。CSでは特に最後の安定期の段階で、持続可能で自立的な社会の形成という要素を加えています。仏陀バンクの運営や、適正技術（水車、風車、バイオガス、農業技術等）の相互技術交流などがそれに相当しています。仏陀バンクの融資の後には、僧侶や仏陀銀行のスタッフたちが相談役となり、日常的にアドバイスを行っています。日常の法務ではなかなか体験することのできない「生きるための仏教」に関与する僧侶たちは皆、そこに大きな喜びを見出しています。そして、こうした僧侶の関与は、敬虔な仏教徒の多いアジア諸国では絶大な効果を発揮しています。これまでの返済率がどこの仏陀銀行でも100%のまま推移しています。それは、不慮の事態によって返済が滞りそうになると、仏陀銀行委員会が開催され、その人の経済状況に応じた「人重視」の対応が取られるからです。

仏陀バンクでは出資の対象となる国、地域を精査した後出資する地域に仏陀バンクの支部を開設しています。

対象となる仏陀バンクの小規模融資の原資は、今のところ四方僧伽・日本で集められた「善意の出資」でアジア各国の仏陀バンクにまかなわれています。

あなたが仏陀バンクに『出資』したお金は、各国で自立を目指す人々に対し「無利子の小規模融資」として貸し出され、返済金が戻ってきた段階で次の支援へと回されます。

つまりこの『出資』は消費されて終わる『寄付金』ではなく、国境も宗教も超えた新しいネットワーク「僧伽」の中で自立した経済圏として循環していく原資になるのです。仏陀バンクの小規模融資は皆さまからの志ある『出資』によって支えられています。皆さまのご協力をお願いいたします。

出資方法

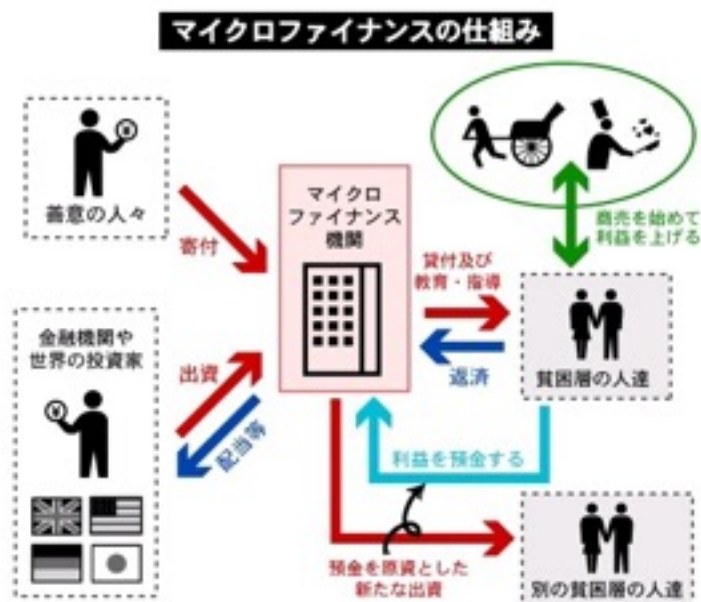
出資金は、お布施を原則とし返却は致しません。出資先にお金はどう使われたのか？という情報はCS日本が責任を持って報告します。(年一回程度)

小規模融資プロジェクトで小規模なものは、現状で大体ワンエリア、15万程度が最低ラインになっています。つまり、このラインに達しない寄付金はプールされ、一定額に達し

次第スタートしています。このため、大口寄付と小口寄付(主に個人)に分けて、寄付を呼びかけています。大口の寄付は、対象エリアをお選びいただけますし、プロジェクトの実施可能額を超えればすぐにスタートできます。現状で、小規模小口融資に関しては、バングラデシュ。米や牛といったものを媒介とする事業には、タイやカンボジアがあります。(米銀行、牛銀行など)

参考資料 グラミン銀行と仏陀バンクの違いは？

グラミン銀行とはそれまでの銀行の欠点の何を超えたのか？銀行とは、高利貸である。貸してたっぷり儲けを得る。儲からないことはしない!!バングラデシュの場合、通常の高利貸の返済利子は、年100~200%にも上っています。この困難を超えて、貧者に無担保・少金利の小規模融資の道を開いたのがグラミン銀行の特徴である。



グラミン銀行の融資制度	
活動国	バングラデシュ
担保の有無	無担保融資
連帯責任	5人のグループに順番に融資。 一人が返済しないと次の人は融資を受けられない
融資金額	平均2万3千タカ(約35万円)
金利	平均20% (但しインフレ率も10%前後ある)
貸し倒れ率	1.78%
問い合わせ先	GRAMEEN Bank (英語)

(以上の図、「マイクロファイナンス解体新書」<http://mf.nobisiro.com/> より)

しかし、次のような点も指摘されている。

① 返済利子が低いと言っても20%

これで、果たして本当に低いと言えるのか？という疑問がある。さらに税金、手数料、強制的な貯金のための減額、米国銀行の標準的な年利換算を入れると、グラミン銀行ですら**実際は30~50%の年利率になる**、とされている(オレゴン大学のLamia Karimの調査研究 2008年発表)。しかし、これに対して、インフレ率の高いバングラデシュでは、20%の固定利息は実質10パーセント程度の利息にしかない。という指摘もある。

- ・お金を貸し付けた後、その実際の用途は借り手の責任に委ねられている。そのために以下の問題が指摘されている。事業促進という当初の目的よりは、現在の消費を賄うために使われることが多い。
- ・グループ内での連帯責任性を取っているため、メンバーのひとりが返済不履行となると、しばしば事件が起きる。
- ・グラミン銀行の圧倒的な借り手である主婦が借りたローンの95%を夫が使ってしまう。

※調査に訪れた農村部で夫たちは、(イスラム社会では)「妻は夫の所有物なので、妻の借りたローンは当然夫の所有物である」と述べた。

これに関し、仏陀バンクは次のように見えています。

- ・利子の問題は一概に、高金利と断定できない。税金や手数料も商業銀行ならではの問題。
- ・貸した後のケアも、当該コミュニティが行っている。人間(女性)にお金を貸すのではなく、事業に貸している。役員の厳正な審査を経て貸付けが行なわれるということで、個人的な目的で融資を受ける人は選出対象から外することができる。トラブルは起きにくい。
- ・貸したお金が回収されないと、次の融資ができない点は同じ。しかし仏陀バンクは連帯責任での賠償を求めている。

仏陀バンクとグラミン銀行の最大の違いは、貸し出しにより利益を追求する構造を持った西洋資本主義型の銀行と、利益を出資者ではなく当該コミュニティの自立に還元する仕組みを持った小規模融資であるという点である。貧困や自立は、利益追求という価値観を乗り越えることが出来、かつ人々の精神面をも支えることのできる構造によってのみ可能性がある。

しかし、商業型のグラミン銀行と比較した場合、仏陀バンクの欠点としては、以下の点が挙げられる。

- ・短期間で大々的には広げられない。
- ・地域コミュニティの顔の見える顧客情報に依拠しているため、「顔の見える広域」での融資には実績がない。
- ・グラミン銀行のように、金融機関の形式を取れば、株式発行やファンドを通じて出資を募ることなど、エクイティファイナンスがかなり自由に行えるが、仏陀バンクはそれを持っていない。

※NPOやNGOの場合、エクイティファイナンス（株式発行）での資金調達が困難である。多くの国では、NGOのような非営利団体が、株式発行による投資家からの資金調達には、制限が設けられている。同様に、投資ファンドのような形での資金集めも、困難であるケースが多い。※しかし、株式発行や金融形式の投資ファンドは難しくとも、個々の企業のCSRへの働きかけという意味では出資を呼びかけることも可能。

などが挙げられる。しかし、これも逆にグラミン銀行の問題点と、その発生理由を考えると、仏教精神に基づく相互扶助、その実践を通じた、真に民衆に寄り添ったゆっくりとした確かな歩みこそが実は大切なのではないだろうか？